

(2) 日系農業者等連携強化会議の開催

本事業により実施する研修、セミナーの円滑かつ効果的な実施を確保し、日本と日系農業者等、また日系農業者等同士の交流を促進するため、日系農業者等連携強化会議を以下のとおり開催した。

回	日程	場所	参加者
第1回	令和6年7月9日	オンライン	99名
第2回	令和7年1月31日	サンパウロ（ハイブリッド）	134名

開催概要及び実施結果を以下に示す。議事録や参加者の詳細は別冊の事業実施報告書資料編に記載する。

1. 第1回日系農業者等連携強化会議

1) 基本情報

日程	令和6年7月9日（火）8:00-10:00（日本時間）
場所	オンライン方式（ZOOM）
参加国	ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ペルー、コロンビア、メキシコ、エルサルバドル等の中南米諸国
参加者	合計：99名 日系農業者：82名（ブラジル31名、アルゼンチン9名、パラグアイ4名、ボリビア8名、ペルー9名、コロンビア9名、メキシコ10名、エルサルバドル2名） 関係機関：17名（外務省、在パラグアイ日本国大使館、在ボリビア日本国大使館、在ペルー日本国大使館、農林水産省、事務局）
内容	- 昨年度事業振り返りと今年度事業内容説明 - 事業内容等に関する希望、意見交換 - 訪日技術研修・産学官交流の参加者募集
言語	日本語・ポルトガル語・スペイン語同時通訳

2) 参加者

ブラジル(31)	トメアス農協(1)、ノバアリアンサ農協(1)、サンフランシスコバレー日伯協会(1)、セラードブラジレイロ農協(1)、Hidro Sabor Horticultura 社(1)、プロミソン日伯協会(1)、南伯サンミゲルアルカンジョ農協(1)、APPC 農協(2)、イビウナ農協(5)、文協 Rural(1)、レジストロ日伯文化協会(1)、ブラジル農協婦人部連合会(2)、JATAK 農業技術普及交流センター(1)、モジダスクルーゼス農村組合(1)、ピンドラーマ農村組合(1)、サンジョアキン農協(1)、ラモス果樹生産者地域連合(1)、ビトゥルナマテ茶協会(1)、Ponte Pronta Marketing 社(1)、Siga Consultoria Agrícola 社(1)、Rede Ecovida 協会(1)、パラナ州農村開発局 IDR(1)、Guinnan Alimentos 社(1)、その他(2)
アルゼンチン(9)	メルコフロール花卉生産者組合(1)、ハルディンアメリカ生産者組合(1)、エコフロール花卉農協(1)、アルゼンチン拓植協同組合(1)、アルゼンチン国立農牧技術院 INTA(1)、Agro Argentina Japon(1)、アルゼンチン花卉農協(1)、オベラ・セントロ地区日本グループ(1)、その他(1)
パラグアイ(4)	パラグアイ日系農協中央会(1)、コルメナアスンセーナ農協(1)、パラグアイ日本研修生協会(1)、個人(1)
ボリビア(8)	コロニアオキナワ農協(3)、サンファン農協(5)
ペルー(9)	エスキベル農畜産物生産者協会(5)、チャンカイ水利セクター利用者会(1)、ラモリーナ農業大学(1)、国立サンマルコス大学(2)
コロンビア(9)	コロンビア日系人協会(4)、Mikan 社(1)、Bioagro 社(1)、Alejandría 農場(1)、バジエデカウカ(1)、個人(1)
メキシコ(10)	東北部日墨協会(1)、アカコヤグア江戸村協会(2)、エスコバル・コンソーシアム(1)、農業コンサルタント(2)、アタウルフォマンゴー生産者、教師(1)、タフコ農場(1)、その他(2)
エルサルバドル(2)	ACBN エルサルバドル(1)、NGO(1)
関係機関(17)	外務省中南米局(1)、在パラグアイ大使館(1)、在ボリビア日本国大使館(1)、在ペルー日本国大使館(1)、農林水産省輸出・国際局(6)、事務局(7)

3) プログラム

No.	時間	内容	担当
	7:30-8:00	受付（接続開始）	
1	8:00-8:05	開始	事務局
2	8:05-8:10	開会挨拶	農林水産省 諸永参事官
3	8:10-8:20	出席者紹介	事務局
4	8:20-8:30	昨年度事業結果	事務局
5	8:30-8:50	今年度事業内容説明	事務局
6	8:50-9:50	意見交換（今年度事業内容に対して）	参加者・事務局
7	9:50-9:55	閉会挨拶	日系農業者代表コロンビア
8	9:55-10:00	告知	事務局



会議資料



会議写真

4) 議事要旨

【開会挨拶】（農林水産省）

- 本事業は1994年より開始した中南米日系農業者と日本との交流事業を前身とし、約30年間継続している。日本と中南米日系農業者の皆様との交流の強化に加え、事業の一環として、日本・中南米間のビジネス創出に取り組んできた。
- 現在ブラジル政府は、劣化牧野対策、持続可能な農業生産等に力を入れている。今後、そのような分野でも日本の技術やノウハウを生かしていく可能性を追求できるのではと思う。

【事業内容の説明】（事務局）

- 昨年度の事業成果報告を行い、さらに本年度事業の概要・目的を説明するとともに、日系農業者連携強化会議及び訪日農業技術研修、産学官交流事業などの開催を案内した。
- 日系農業者訪日技術研修は、「生産性向上」と「循環型農業」の2コースで、各6名の参加者を募集する。産学官交流「日本食輸入」は中南米の食品バイヤー5名を日本に招へいする。
- 訪日研修・交流の実施スケジュール、応募方法、注意点について説明するとともに、9月にブラジルで実施される予定の官民合同の二国間会議について案内し、さらに日系農業者団体のデータベースの更新作業について説明を行った。

【意見交換】

訪日研修

- 「循環型農業」コースについて詳しく説明してほしい。
→（事務局）循環型農業は、有機肥料を使ってその地域の中で資源を循環させ、より環境にやさしい農業。中南米でも微生物資材、バイオスティミュラントへの注目は高く、日本でも様々な微生物資材が使われており、循環型農業に取り組んでいる農家の事例を視察してもらう。
- 研修は、日系人のみを対象としているのか。
→（事務局）主には日系人向けであるが、非日系人での応募は可能で、これまでに日系社会に関わった経験があり、学んだことを日系社会に還元できるのであれば、参加は可能。
- 「生産性向上」コースでは「循環型農業」コースと同様、応募した研修生の活動分野によって、訪問先など、最終的な内容が決まるという認識でよいか。
→（事務局）実際の研修参加者に役立ちそうな訪問先を選定する。

ウェビナー

- 今年度もオンラインセミナーを開催する予定はあるか。
→（事務所）開催する予定。関心のあるテーマを教えていただきたい。

- 現在、関心を持っているテーマは、観葉植物の生産。女性部の方々とのウェビナーにも興味があり、交流イベントなどがあれば参加したい。
 - (事務所) 他の女性部の団体からもそういったリクエストをいただいており、オンラインで交流できるイベントを計画したい。ブラジルでの交流イベントも考えている。

産学官交流

- この事業を通して生まれている大きなコミュニケーション・チャンネルを利用し、日本食品の輸出促進に関する情報発信もできるのではないか。
 - (事務局) 日本食品の輸出はこの事業の目的であり、産学官交流がまさに日本食の輸入を目指すものであり、中南米側のバイヤーが参加するプログラム。参加者自身で取引相手と連絡を取ったり、もしくは事務局に連絡してもらったりして訪問先を組んでいくような形で、参加者に合わせた中身のプログラムを組み、ビジネスパートナーを見つけてもらう。
- メキシコのチアパス州からのマンゴー輸出の可能性、そしてチチュウカイミバエ等に関する制限等についても情報をいただきたい。チアパス州では他にもコーヒー、カカオ豆、チョコレート、ハーブ等の輸出も行っている。
 - (農林水産省) 現状では、チアパス州産のマンゴーは今日本に入れることはできないが、両国間の検疫当局の間で技術的協議を行っている。

5) アンケート結果

会議全体

- 会議はとてもよく準備され、わかりやすかった。また非常に関心の高いテーマが選ばれたと感じている。
- メキシコのマンゴー輸入について農水省の方からすぐに明確な答えが出たことは、すごくよかった。
- こういった会議は、主に候補者を推薦する際の機関の関与を高めるために非常に重要。
- ブラジルに輸出したい企業にとって、準備が極めて重要であり、輸送から販売までの十分な時間を確保するために、2年間の賞味期限があることが望まれる。
- 有機農業で既に良い成果を出している生産者による会合を開催できないか。ヤマカワプログラムやその他の取組など。
- 水不足と暑い気候に特徴付けられるメキシコ北西部の農村地域の日系人コミュニティを支援することを目的として、農牧業についてさらに学びたい。
- メキシコの私たちの地域はアタウルフォマンゴーの主要生産地であり、将来的には日本で販売されるようになることを期待している。また、日本で生産するためにはどのような果物、野菜、穀物が必要かを知っておく必要がある。熱帯地域であるため、様々な作物の可能性がある。

関心のあるテーマ

- 土壌の再生について、特にヤマカワプログラムについて引き続き学びたい。
- 食品製造工場は入れてもらうことが難しいが、オンラインで可能なことがあれば、例えばフリーズドライ製品の工場設備などを見てみたい。
- 家畜、豚、鶏などの飼育場から出る廃棄物を処理する技術。

2. 第2回日系農業者等連携強化会議

1) 基本情報

日程	令和7年1月31日（金）9:00-16:10
場所	ハイブリッド方式（対面方式とオンライン方式の併用） 対面方式：ブラジル・サンパウロ宮城県人会（リベルダージ地区） オンライン方式：Zoom
参加国	ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア、ペルー、コロンビア、メキシコ、ウルグアイ等の中南米諸国
参加者	合計134名 日系農業者：90名（ブラジル59名、アルゼンチン3名、パラグアイ8名、ボリビア4名、ペルー4名、コロンビア7名、メキシコ4名、ウルグアイ1名） 関係機関：44名（派遣日本企業、JICA、在外公館、大学、農林水産省、事務局等）
	対面方式 日系農業者：65名（ブラジル46名、アルゼンチン3名、パラグアイ2名、ボリビア4名、ペルー3名、コロンビア5名、メキシコ1名、ウルグアイ1名） 関係機関：38名（派遣日本企業、JICA、商工会議所、在外公館、農林水産省、事務局等）
	オンライン方式 日系農業者：25名（ブラジル14名、パラグアイ5名、ペルー1名、コロンビア2名、メキシコ3名）

	関係機関：6名（サンパウロ州農業・供給局、JICA等）
内容	<ul style="list-style-type: none"> - 今年度事業実施報告 - 分科会（1: 生産性向上、2: 循環型農業、3: 女性部活動） - 意見交換（今年度事業、次年度以降の事業内容）
言語	日本語・ポルトガル語・スペイン語同時通訳

2) 参加者

対面方式

ブラジル(46)	トメアス農協(2)、サンフランシスコバレー日伯協会(3)、プロミゾン日伯協会(1)、バストス地域鶏卵生産者協会(2)、バルゼアアレグレ農協(5)、レジストロ日伯文化協会(3)、ピラールドルAPPC農協(3)、南伯サンミゲールアルカンジョ農協(1)、イビウナ農協(2)、イビウナ農村組合(1)、モジダスクルーゼス農村組合(4)、ピンドラーマ日伯協会(1)、ボトゥカトゥ日伯協会(2)、ブラジル農協婦人部連合会(6)、パラナ日伯商工会議所(1)、ポンタグロッセンセ農協(1)、コウチ・モリカワ社（ポンタグロッサ）(1)、南伯ロンドリーナ農協(1)、ウニオンカストレンセ農協(1)、ギンナンアリメントス社(1)、パラナ州農業技術普及公社(1)、アサイ日伯協会(1)、ラーモス果樹生産者地域連合(1)、サンジョアキン農協(1)
アルゼンチン(3)	ハルディンアメリカ生産者組合(2)、AgroArgentinaJapon(1)
パラグアイ(2)	コルメナアスンセーナ農協(1)、イグアス農協(1)
ボリビア(4)	サンファン農協(2)、コロニアオキナワ農協(2)
ペルー(3)	エスキベル農畜産物生産者協会(2)、インベルシオネスホタル社(1)
コロンビア(5)	コロンビア日系人協会(5)
メキシコ(1)	アカコヤグア江戸村協会(1)
ウルグアイ(1)	ウルグアイ日系人協会(1)
関係機関(38)	ゼンダイ社(1)、ヤマト商事(1)、ニッポンベビーダス社(1)、ブラジル日本文化福祉協会（文協）(2)、文協 Rural(1)、ポンテプロンタマーケティング社(1)、サンパウロ州農業・供給局(2)、日本経済新聞(1)、ブラジル日報(1)、株式会社黄金の村(1)、株式会社バルサー・インターナショナル(2)、トロピカルテクニカアグリコラ社(3)、JICA ブラジル(2)、在アルゼンチン日本国大使館(1)、在パラグアイ日本国大使館(1)、在ボリビア日本国大使館(1)、在ペルー日本国大使館(1)、在コロンビア日本国大使館(1)、在ウルグアイ日本国大使館(1)、農林水産省審議官(1)、農林水産省 輸出・国際局(3)、事務局(10)

オンライン方式

ブラジル(14)	ビトゥルナマテ茶協会(1)、弓場農場(1)、アルトパラナイーバ農協(1)、バルゼアアレグレ農協(1)、ミナスジエライス州農業技術普及公社(1)、レジストロ日伯文化協会(1)、モジダスクルーゼス農村組合(1)、養蜂生産者支援センター(1)、ロライマ日伯協会(1)、イビウナ農協(1)、ノバアリアンサ農協(1)、スルミナス農協(1)、JATAK 農業技術普及交流センター(1)
パラグアイ(5)	パラグアイ日系農協中央会(1)、パラグアイ日系婦人部連合会(1)、ラパス農協(1)、パラグアイ農業技師協会(1)、パラグアイ日系農牧協会(1)
ペルー(1)	エスキベル農畜産物生産者協会(1)
コロンビア(2)	コロンビア日系人協会カリ(1)、Alejandría 農場(1)
メキシコ(3)	アカコヤグア江戸村協会(1)、サンルイスボトシ農村普及局(1)、技術アドバイザー(1)
関係機関(5)	サンパウロ州農業・供給局(1)、JICA パラグアイ(2)、JATAK セラード開発メンバー(1)、元JICA ボリビア専門家(1)

3) プログラム

No.	時間	内容	担当
	08:00-09:00	受付	—
1	09:00-09:05	開会	事務局
2	09:05-09:10	農林水産省挨拶	農林水産省
3	09:10-09:25	出席者・組織紹介	事務局
4	09:25-09:35	報告：令和6年度事業全体	事務局
5	09:35-09:55	発表：訪日事業（概要） 1: 日系農業者訪日技術研修「生産性向上」 2: 日系農業者訪日技術研修「循環型農業」	訪日事業参加者
7	09:55-10:55	意見交換（今年度実施結果・今後の実施内容）	参加者・農水省
8	10:55-11:10	休憩	—
9	11:10-11:30	農業技術交流参加企業発表	
10	11:30-12:30	農業技術交流参加企業との意見交換	

11	12:30-14:00	昼食	
12	14:00-15:15	発表：訪日事業 1: 日系農業者訪日技術研修「生産性向上」 2: 日系農業者訪日技術研修「循環型農業」 3: 日系農業者等ウェビナー「女性部活動」	訪日事業参加者
13	15:15-15:30	休憩	—
14	15:30-16:15	分科会 1: 生産性向上、2: 循環型農業、3: 女性部活動	事務局
15	16:15-16:20	事務連絡	事務局
16	16:20-16:30	閉会挨拶・写真撮影	日系農業者
17	16:30-18:00	懇親会	—



農林水産省挨拶



事業報告



訪日研修報告



意見交換



訪日研修報告



分科会



日本企業との意見交換



全体集合写真

4) 議事要旨

【事業実施結果報告】

- 今年度事業で行った取組の概略を事務局から報告。
- 今年度実施した2つの訪日研修（日系農業者訪日技術研修「生産性向上」「循環型農業」コースの代表者から発表を行い、その後、事務局・農林水産省との意見交換を実施。

【意見交換】

研修事業

- 女性向け訪日研修が行われなかつたことは残念であり、異なる地域の女性たちとの情報共有の場の継続を希望する。研修があることで参加者は他地域の女性部との交流ができ、女性のネットワークを広げて情報交換を行つてゐる。
- 研修時期、応募要件、費用負担、使用言語等について教えてほしい。
 - （農水省）今年度の研修は「生産性向上」と「循環型農業」に焦点を当てたが、研修内容は毎年見直し、参加者の関心や成果を踏まえて決定する。女性向け研修の継続は未定だが、要望があれば検討する。来年度の研修に関しては、研修の期間や内容について様々な意見があり、言語の問題も含め、スペイン語圏の研修生をまとめる等、より効率的な枠組みを検討。今年の課題や反省点を踏まえて改善する方針。
 - （事務局）これまでの研修時期は10～11月、応募は8月頃になる見込み。参加者の選考基準と費用負担に関しては、研修内容と経験が合致しているかを重視して選考しているが、ブラジルからの応募者が7割ほどと圧倒的に多いため、ブラジルからの参加が多くなる傾向。費用はほぼ全額事業で負担、自己負担は個人的な支出のみ。

日系農業者の課題

- ブラジル北東部では日系農協が後継者不足に直面しており、特に若者を呼び寄せるための取り組みが必要。ブラジル各地の日系コミュニティ間及び農協間の連携強化や若い世代の取り込みに農林水産省の支援は非常に重要。
- 2019年の研修で、家族経営の事業継承が重要な課題であると認識。日系社会でも後継者不足が問題となっており、成功事例から学ぶ研修が必要。
- サンパウロ州政府機関では日系の研究者が農業技術開発に貢献しており、州政府として農林水産省との連携を強化したい。
 - （農林水産省）各国で世代交代が課題になっており、農水省としては直接支援は難しいが、研修などを通じた間接的な支援を考えている。サンパウロ州政府との窓口については、在ブラジリア日本大使館や在サンパウロ総領事館が窓口となる。具体的な要望があれば、窓口を通じて検討。
- サンパウロ州南部の日本人移民の最初の移住地では、日本移民の農業遺産を守ることが重要視されており、歴史的環境を保護する取り組みに協力を求める。大規模農業が広がる中、日本移民が作り上げた伝統的な農業スタイルの維持も課題。
- ブラジルの大規模農業は機械化が進んでいるが、小規模野菜農家では手作業が主流。人手不足が深刻で、特に若者は手作業での農業を敬遠。野菜移植機などの機械が必要だが、日本製の機械は輸入コストが高く、現地生産が望ましい。小規模農家の市場規模は約25万人で、機械化の需要は大きい。現地生産を行う日本企業が望ましい。ヤマカワプログラムの成功にも機械化が必要で、不耕起栽培に適した機械の開発を期待。
 - （農林水産省）
ブラジルでは7割が小規模・中規模の家族経営農家であると認識している。日本も同様の課題を抱えており、相互の意見交換を通じた解決策が重要。日本の農業機械メーカーについては、日本の農業機械メーカーとブラジルの農業者を繋ぐ機会を検討。

日本とのビジネス

- 日本への輸出のため、日本市場の情報や消費者の要求水準を知ることが重要。蕎麦の輸出を検討している。他の省庁とも連携した統合的な市場調査・情報プラットフォームが必要。
- パラナ州農業研究所は蕎麦の品種を開発し、2期作ではなく、低成本で3期作の生産が可能。現在はカバーフロップとして蕎麦が栽培されている。蕎麦の輸出のためには日本側の歩み寄りが必要で、双方の取組が必要。

日本のビジネスモデルからの学び

- 多くの研修生が日本の道の駅モデルに関心を持ったが、ブラジルでは未だ成功モデルを実現できていない。会議に参加していたサンパウロ州政府の代表者に、公共政策としての導入を提案。

- サンパウロ州バストス市とミナスジェライス州ランバリ市の2か所に道の駅の直売所を正式な事業手続きを行い設置したが、ブラジルでは衛生規制が非常に厳しい。一方で、非公式の路上販売は問題にならない。正式な事業運営をすると規制が多く、販売許可も必要で運営が困難。
→（農林水産省）
- 日本の道の駅は女性農業者の収益向上に寄与した。日本の道の駅のビジネスモデルをそのまま導入するのではなく、各国のニーズに合わせたカスタマイズが必要。
- 日本の生物学的農法に注目し、研修で日本の農業技術の価値を実感。日本には有用微生物、ヤマカワプログラムやオルガミンなど持続可能な農業や環境再生型農業の知識があり、ブラジル農業の発展に貢献できる。専門知識を有する方とのさらなる交流により、日本の知恵や技術を学ぶことが必要。
- 日本の製品パッケージは魅力的で、ブラジルと比較して大きな差がある。商品開発、パッケージデザイン、品質管理を研修テーマに加えることを提案する。

5) 現場視察

第2回日系農業者等連携強化会議の翌日にサンパウロ近郊のピンドラーマ（モジダスクルーゼス市）での現場視察を行った。

日程	令和7年2月1日（土）7:30-17:30																		
場所	ブラジル・ピンドラーマ（モジダスクルーゼス市）																		
参加者	<p>合計：75名</p> <p>日系農業者：54名（ブラジル35名、アルゼンチン3名、パラグアイ2名、ボリビア4名、ペルー3名、コロンビア5名、メキシコ1名、ウルグアイ1名）</p> <p>関係機関：21名（派遣日本企業、在外公館、農林水産省、事務局）</p>																		
内容	<ul style="list-style-type: none"> - ブラジル現場の視察、中南米日系農業者同士の交流 - プログラム <table border="1"> <thead> <tr> <th>時間</th> <th>内容</th> <th>備考</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>07:30</td> <td>ホテル出発</td> <td>バス移動</td> </tr> <tr> <td>10:00-12:00</td> <td>セグチ農場、ヤマカワ農場視察</td> <td>野菜露地栽培、水耕栽培</td> </tr> <tr> <td>12:00-14:00</td> <td>昼食・交流会</td> <td>ピンドラーマ日伯協会</td> </tr> <tr> <td>14:00-17:00</td> <td>センザキ農場、アラカワ農場</td> <td>農村ツーリズム、果物観光農園</td> </tr> <tr> <td>19:30</td> <td>ホテル到着</td> <td>バス移動</td> </tr> </tbody> </table>	時間	内容	備考	07:30	ホテル出発	バス移動	10:00-12:00	セグチ農場、ヤマカワ農場視察	野菜露地栽培、水耕栽培	12:00-14:00	昼食・交流会	ピンドラーマ日伯協会	14:00-17:00	センザキ農場、アラカワ農場	農村ツーリズム、果物観光農園	19:30	ホテル到着	バス移動
時間	内容	備考																	
07:30	ホテル出発	バス移動																	
10:00-12:00	セグチ農場、ヤマカワ農場視察	野菜露地栽培、水耕栽培																	
12:00-14:00	昼食・交流会	ピンドラーマ日伯協会																	
14:00-17:00	センザキ農場、アラカワ農場	農村ツーリズム、果物観光農園																	
19:30	ホテル到着	バス移動																	



農場視察（セグチ農場、ヤマカワ農場視察）



ピンドラーマ日伯協会での昼食・交流会



農場視察（センザキ農場、アラカワ農場）

6) アンケート結果

連携強化会議に関する回答

- 農業・食品産業において収益性と持続性を高めるという共通の目標に向けて、中南米農業者を団結させるための素晴らしい機会でした。
- 非常に生産的な会議でした。日本におけるケーススタディや農協・日本人協会などが直面する問題（次世代への継承や人手不足の問題等）や農業に関する多様な情報を得ることができました（農産物に付加価値を与える方法や生産性を向上するための方法、農業観光等）。
- 将来、起業などを考える際に必要となるネットワークの拡大と、他の参加者の経験について学ぶことが出来ました。私たちが関心を持つテーマが取り上げられ、非常に良い学びの機会となった。大変よく企画されたイベントでした。
- 多くの国の方々が集まり、素晴らしい会議でした。情報交換のための貴重な機会でした。
- 研修プログラムを通して、研修生だけではなく、それぞれの日系コミュニティも多くのものを得ていると感じた。農水省のこのプログラムは、「学び」という観点から日系コミュニティに大いに貢献している。
- 循環型農業コースに関する発表と女性部活動についての発表が特に興味深かったです。
- とてもダイナミックで情報豊かなイベントでした。日本での研修や、最新の技術について知ることができ、発表も素晴らしかったです。
- 各農協や組織について学ぶことができ、ネットワーキングを行うためのとても良い機会であった。ブラジルをはじめ、中南米諸国、そして日本の（農産物の）品質基準をより深く理解する必要があると感じました。
- このようなイベントや研修コースに関してのみなさんの関心は非常に高いと感じた。

視察に関する回答

- ラテンアメリカの農業セクターの主な課題は農産物の販売であり、今回は農協における農業者の団結がこの問題を解決するためのカギであると感じました。ピンドラーマでの素晴らしい歓迎会は、日本文化の保存における女性の重要性を示していると感じました。
- 栽培方法に関する知識を得ることができ、さらに多くの方々と会い、ネットワークを拡大し、友達をつくる良い機会となりました。
- 伝統的な栽培方法（土壤栽培）と新しい技術（水耕栽培）によるレタス栽培を比較するための貴重な機会でした。また、農協という枠組みで、農業従事者たちが協力し合うことの重要性について学びました。
- とても良い経験でした。多くのコミュニティを訪問し、栽培されている農作物やそれぞれのコミュニティが抱える課題について学ぶことができました。
- 今回はじめて参加しましたが、ブラジルの日系人の方々が栽培されている農作物の多様性について学ぶことができ、大変貴重な経験でした。
- 農産物がどのようなかたちで、誰によって栽培され、私たちの食卓に届くまでの過程を学ぶことが出来ました。さらに、農業者たちと土壤や気候、環境との関係についても学べる機会となりました。
- 果物や葉野菜の生産者たちの献身的な姿勢に感動しました。

(3) 訪日農業技術研修、ウェビナーの開催及び専門家派遣

日系農業者等の農業技術・農業経営のスキルアップを図るため、以下の研修、ウェビナーを実施した。

- ①日系農業者訪日技術研修（日本への招へい）
- ②日系農業者等ウェビナー（オンライン）
- ③農林水産業・食産業分野に係る専門家派遣による研修（中南米現地）



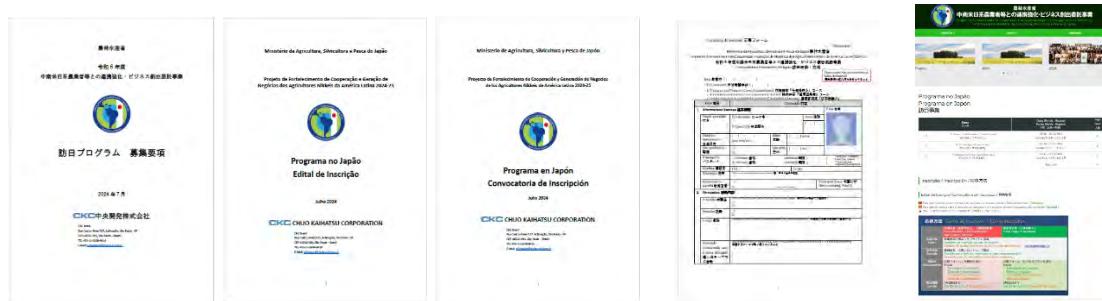
(3)① 日系農業者等訪日技術研修（日本への招へい）

農林水産業・食産業分野の組織やビジネスを牽引する役割を担う可能性がある者を対象に、以下の2コースの訪日技術研修を設定した。日本の大学、研究機関、農業協同組合、農家、企業等を訪問し、座学と実習により学べる内容とともに、日本国内の農業関係者と交流が深められる研修を実施した。募集から選考、実施にいたる内容を以下に示す。

コース	日程	研修生
(1) 生産性向上	9月 28日～10月 18日	6名（ブラジル4名、ペルー1名、パラグアイ1名）
(2) 循環型農業	10月 19日～11月 9日	6名（ブラジル2名、パラグアイ2名、コロンビア1名、メキシコ1名）
合計 <u>12名</u> （ブラジル6名、パラグアイ3名、ペルー1名、コロンビア1名、メキシコ1名）		

a. 募集方法

募集要項を日本語・ポルトガル語・スペイン語の3か国語で作成し、事業ウェブサイト上に掲載した。募集は7月9日の第1回日系農業者等連携強化会議から開始し、7月28日に締め切った。募集の周知には、事業Facebookへの掲載、農業者団体へのメール連絡、J-AGRO（過年度研修生OB会）のWhatsAppグループを通じた周知などを行い、情報が広く伝わるように取り組んだ。



募集要項（日本語・ポルトガル語・スペイン語）

応募フォーム

事業ウェブサイト掲載

b. 応募人数

募集期間は3週間弱であったが、12名の人数枠に対して合計で32名の応募があり、倍率は2.7倍であった（令和5年度も同様に2.7倍程度）。応募者の内訳は32名中、年齢別で20代：9名、30代：9名、40代：3名、50代：9名、60代：2名、世代別で1世：0名、2世：6名、3世：15名、4世：2名、非日系：9名であった。国別は下表のとおり。大半が農業者・農業コンサルタント・農協関係者などの農業関係者であったが、農業関係企業・研究者・大学生などからの応募もあった。

研修コース	人数枠	応募数	ブラジル	アルゼンチン	パラグアイ	ボリビア	ペルー	コロンビア	エキコ
1.生産性向上	6名	11名	9名	0名	2名	0名	1名	0名	0名
2.循環型農業	6名	21名	12名	2名	2名	0名	0名	2名	1名
合計	12名	32名	21名	2名	4名	0名	1名	2名	1名

c. 研修生の選考

- 選考にあたっては、書類審査および面接を実施し、評価基準に従って採点を行い順位をつけた。評価基準は、1.活動内容（業務、職歴）や2.目的意識（志望動機、所属組織の課題、推薦理由、帰国後の活動案、継続的取組の期待度）、3.その他（コミュニケーション能力、指導力・発信力）の3つの観点から30点満点で設定し、評価結果を点数化した。
 - 選考にあたっては、特に業務経験や目的意識を重視し、研修テーマと関連した業務内容であるか、明確な志望動機を有しているかを重要な評価項目とした上、帰国後に研修の知見を普及できる指導力・発信力を持った人材を選定することを目指した。最終的に農林水産省と協議の上で、8月8日に研修生を決定した。

d. 研修の準備・実施

- 研修の実施に当たっては、研修の約5週間前にはオリエンテーションを実施し、渡航の手続きについての説明を行った。さらに、研修で学びたいことや個別の研修への要望を聞き取り、研修プログラム中に個別の要望に応えられるように組み込んだ。航空券購入や必要とする人には日本ビザの申請を行い、研修の2週間前には研修日程案や滞在先情報・渡航時の注意をオンライン会議で案内した。
 - 研修生は自分の地域・所属先や自身の活動をプレゼンするための資料を作成し、到着翌日のオリエンテーションの際に活動紹介を行った。さらに研修開始時には、研修プログラムとして訪問先の場所・目的・内容・URLなどの情報を提供して、訪問前に研修への準備ができるようにした。展示会訪問時には全出展者リストから関心が高いと思われる企業リストを作成し、ポルトガル語・スペイン語で作成した資料を研修生に配布した（生産性向上コース）。



研修プログラム



訪問先情報



展示会出展者リスト

e. 研修成果の確認・報告

- 研修成果の取りまとめとして、研修生は同じ言語同士のグループで日々の視察先の情報を書き残す報告書を作成した。さらに報告会用のプレゼン資料を個人ごとに作成し、研修中の所見や考察、帰国後のアクションプランを取りまとめて発表した。報告会は農水省に対するものに加えオンライン形式で行うことで、中南米の農協や所属先からも参加できる形とした。
 - さらに第2回日系農業者等連携強化会議に参加した研修生は、会議内で研修成果の報告を行った。研修参加者報告書の詳細は別冊の事業報告実施書資料編に記載する。

1. 生産性向上コース

1) 基本情報

日程	令和6年9月28日～10月18日（21日間）
場所	千葉県、沖縄県、東京都、神奈川県、山梨県、青森県（青森は個別）
参加者	6名（ブラジル4名、ペルー1名、パラグアイ1名）
内容	<ul style="list-style-type: none"> 農業展示会 J-AGRI（農業 Week）、有用微生物実践農場、農業試験場、東京農業大学・宮古亜熱帯農場などを訪問し、日本の最新の農業技術・資材、微生物による土壌改良の技術を学び、農業経営のスキルアップを目指す。 土壌改良技術、農産物の高付加価値化、6次産業化、地域づくり、スマート農業等について学び、日本国内の農業関係者と交流を深める。

2) 参加者

No.	性別・年代	国	組織	業務
1	男性 20代	ブラジル	APPC 農協	農業技師、生産者
2	男性 60代	ブラジル	パラナ日伯商工会議所	副代表
3	男性 40代	ブラジル	サンジョアキン農協 SANJO	生産者（りんご）
4	男性 40代	ブラジル	ラーモス果樹生産者地域連合 UNIFRUTA	生産者（和梨）
5	男性 30代	パラグアイ	コルメナアスンセーナ農協 CAICA	生産者（野菜）
6	男性 30代	ペルー	エスキベル農畜産物生産者協会 APAE	生産者（野菜）

3) 日程

日数	日にち	曜	内容	場所
1	2024/9/28	土	中南米出発	
2	2024/9/29	日	機内	
3	2024/9/30	月	日本到着	東京
4	2024/10/1	火	参加者活動発表・オリエンテーション	東京
5	2024/10/2	水	宮古へ移動、東京農業大学宮古亜熱帯農場	沖縄
6	2024/10/3	木	オルタナティブファーム宮古（付加価値）、那覇へ移動、EM 研究機構	沖縄
7	2024/10/4	金	サンシャインファーム、北中城村植物ごみ資源化ヤード、ユニバーサルビレッジ、新垣トマト、玉城牧場	沖縄
8	2024/10/5	土	千葉へ移動	千葉
9	2024/10/6	日	休日	千葉
10	2024/10/7	月	フルーツファーム向後（ぶどう）、渡辺農場（トマト） 個別訪問（青森りんご研究所、ブラジル大使館）	千葉
11	2024/10/8	火	神奈川県農業技術センター、荒井商事平塚土屋農場（直売所）	神奈川
12	2024/10/9	水	J-AGRI 農業 Week（農業展示会）	千葉
13	2024/10/10	木	報告書作成、J-AGRI 農業 Week（農業展示会）	千葉
14	2024/10/11	金	アグリ王（植物工場）、海外移住資料館（JICA 横浜）	神奈川
15	2024/10/12	土	休日	千葉
16	2024/10/13	日	休日	千葉
17	2024/10/14	月	葡萄専心株式会社（オルガミン実践事例）、富士きつ（梨）	山梨
18	2024/10/15	火	農林水産省 成果報告会	東京
19	2024/10/16	水	成果報告（オンライン）・総括	東京
20	2024/10/17	木	日本出発	
21	2024/10/18	金	中南米帰着	



東京農業大学・宮古亜熱帯農場



サンシャインファーム（EM 実践農場）



フルーツファーム向後



青森りんご研究所



神奈川県農業技術センター



J-AGRI 農業 Week (展示会視察)



海外移住資料館



和梨ジョイント仕立て (富士きuchi)



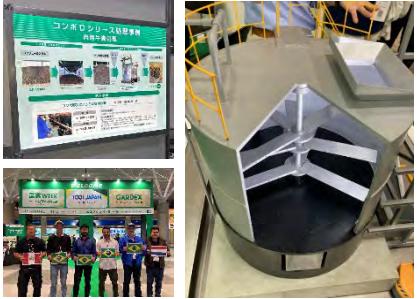
農林水産省 成果報告会

4) 実施概況

- **J-AGRI (農業Week)** という日本最大の農業分野展示会の訪問を中心に研修日程を組み立てた。研修参加者は取り組む農業形態や栽培品目も異なるため、関心に合わせてブースを訪問して情報収集ができる展示会訪問は非常に有意義で効率的であり、参加者が報告書の中で記載した「有益であったこと」に挙げた製品・取組を見つけた研修生も多かった（有機物発酵機械、葉面肥料など）。さらにこの研修コースでは沖縄を訪問し、東京農業大学・宮古亜熱帯農場で微生物（きのこ廃菌床）を活用した土壤の改良、有用微生物を活用した収量増加の取組など、中南米でも現在関心の高い持続的な農業の取組を視察した。微生物を使用して同じ土地でトマトを20年以上栽培していることや、有機残渣を堆肥に変える北中城村の資源化センターは大きな関心を集めた。
- パルサー・インターナショナル株式会社が販売する葉面散布有機肥料オルガミンを活用している農家の訪問を組み入れ（千葉、山梨）、ブラジルで製造されるオルガミンが日本の農家に高く評価され使用されている現場を視察した。同製品はブラジルを始めとする南米で入手が可能であるため、収量増加に繋がる可能性がある。なお、その後1月からの専門家派遣（農業技術交流プログラム）により、パルサー社はブラジルを訪問し、オルガミンを中南米の日系農業者に紹介した。
- 神奈川県農業技術センターの訪問では、同センターが開発した梨のジョイント仕立てによる栽培方法を見学した後、山梨県の富士きuchiでジョイント仕立てによる梨栽培の実践事例を視察した。ジョイント仕立ては、収穫量の増加が早く、列方向に直線的な作業になるため効率的であり省力化に繋がる先端的な栽培方法。新たな果樹を始める上で、非常に参考になったという声が聞かれた。
- JICA横浜を訪問して、JICAの日系社会との取組について説明を受けると共に、海外移住資料館では移住の歴史について話を聞き、さらに乗船記録や移住地記念誌などを閲覧し、研修生自身の家族のルーツや移住地の歴史を振り返ることで、日本との絆・ルーツを再認識してもらう機会とした。家族の名前を記録の中に見つけることは感慨深く、本事業の目指す日本との絆の再構築に繋がるものである。
- スペイン語圏2名、ポルトガル語圏4名の参加者であったため、研修行程には通訳者はポルトガル語1名、スペイン語1名が帯同し、通訳送信機・受信機を使って逐次通訳を2言語同時並行で行う方式とした。訪問先の選定には研修生の関心・希望に合わせて設定した他、りんご生産者が希望した青森県りんご研究所の訪問はグループから離れて個別で実施した。できる限り各自の希望に合うように研修を組み立て、帰国後の活動に活きるように取り組んだ。研修生の年代も20代から60代まで幅広く、各自の経験から技術的な議論が活発にされ、帰国後に研修で得た知見が普及されることへの期待が感じられた。

5) 参加者報告書 (抜粋)

a. 有益であったこと

<p>①J-AGRI／萩原工業の光反射・遮熱技術 (Tarpee)</p> 	<p>②J-AGRI／有機廃棄物発酵機械 (中部エコテック COMPO)</p> 
<p>③青森県りんご研究所におけるりんごの栽培の管理・生産・衛生対策</p> 	<p>④山梨県富士吉田市での和梨の生産における土壤改良や高品質生産管理 (ふじ吉)</p> 
<p>⑤J-AGRI／葉面散布有機肥料オルガミン (パルサー・インターナショナル株式会社)</p> 	<p>⑥有用微生物を活用した沖縄県北中城村の有機廃棄物のリサイクル処理施設</p> 

b. 帰国後のアクションプラン

- ①ブドウの着色改善のために、光反射・遮熱効果をもつTarpeeを実験的に使用し、地域の生産者にその結果を報告し、実際に視察に来もらう。
- ②ブラジルの5つの主要な協同組合と、日本のスタートアップであるSagriのビジネスを現地において可能にする。
- ③サンタカタリーナ州農牧研究普及会社およびサンジョアキン農協と青森県のりんご研究センターの交流を復活させ、共同研究や情報交換を行う。
- ④有用微生物、オルガミン、ボカシなどの有機資材を使用して、土壤改良のための効果を確かめる。
- ⑤研修を通して学んだ新しい技術（特に農薬の使用を減らし、持続的な農業を可能とする技術）の効果を母国の環境でテストし、その知識と結果を日系コミュニティの生産者と共有する。
- ⑥有用微生物やオルガミンなどのサプライヤーと連絡を取り、野菜やフルーツ農園、鶏などの小動物農場で野外テストを行い、その効果を検証する。